

## ～人とぶつかるコミュニケーション～

### 目次

0. はじめに
1. 動機
2. ぶつかれなかった私
3. ぶつかっていった私
4. なぜ「ぶつかる」の？
5. my スタンドアード
6. 今後もぶつかります宣言
7. 結論
8. あとがき
  - 8-1. 私にとってのレポート活動の意味
  - 8-2. 「ことばの市民になる」とは？

### ーこのレポート活動の意味

#### 0. はじめに

本レポートは、私の考えをある程度整理した段階で、授業のグループ以外の人にインタビューという形で対話をした。インタビューは古くからの友人Sさん（女性・30代主婦）に行った。私の考えを裏付けたところや、それによって変わった部分などを、対話内容をまとめたものと、会話そのままのものを載せた。

#### 1. 動機

コミュニケーションって一体なんだろう？ 人や環境により様々な解釈があるこの言葉、私はどう思っているのだろうか。

私は、人とコミュニケーションする時の形態に興味がある。普段から、なるべく思ったことを言う

ように、また相手にも言ってもらえるようにしている。それを「ぶつかるコミュニケーション」とする。「人とぶつからずに、円滑な人間関係を作るために良いコミュニケーションを取りましょう」そんな文句を聞いたり、本を見かけたりする。実際、この授業で一緒になったグループの人たちからも「なんでわざわざぶつかりに行くの？」という意見が出た。どうやら、「ぶつかる」とは、マイナスイメージのようである。

それでも私は「ぶつかりたいなあ」と思うのである。私はプラスのイメージを抱いている。補足するが、「ぶつかる」とは、やたらとけんかを持ちかけることではない。「ぶつかる」は、自分の考えがないと出来ないコミュニケーションであると考えている。だから自己の考えと、他者の考えがぶつかることは、けんかではない、プラスの作業と考えているのである。

私はなぜぶつかることにプラスの意味を持たせ、実行しているのだろうと考えるために、これをテーマとし、考えていくことにした。

## 2. ぶつかれなかった私

「ぶつかる」ことを意識したきっかけは、転校が多かった小学生のときである。今思うと、小・中学校は特にその世界が全てだったから、学校が変わるということは、文化も言葉も違う異国へ行って、そこに前からいた人と遜色なく行動しなければならないというイメージがあり、私にとってそれはもう大変なことだった。だから、最初の頃は「ぶつかる」なんてとんでもない、どうやったら同じメンバーとして受け入れてもらえるかが一番大事なことだった。それはクラスメートだけではなく、先生に対しても同じ気持ちだった。その中で、一つだけ「ぶつかる」ことが多かった小学校がある。考え方を揃えることは最初から無理だという前提がある学校（クラス）だった。具体的に言うと、日本語が全くわからない生徒がいたり、身体や学習能力に障害があるとされる生徒と同じクラスで過ごした経験だった。同じ算数の教科書を持っていても、ほとんど進まなかった記憶がある。しかし、特徴のある彼らに合わせることだけはせず、みんな一人ひとりが「どうなの？」と自分の気持ちと向き合う時間があり、ある範囲では、その思いで行動することが出来たと記憶している。（例えば、進まない算数の授業がイヤだと感じた生徒は、他のクラスで勉強することも許された。）

もしかしたら、これは勝手に振る舞い・自分勝手な人間形成へとつながるものかもしれないが、私には「自分で考える」ことに意味をもたせることができ、自分にとっていい経験だった。

しかし、そんな学校はそれきりで、また転校を重ねることで「ぶつからない私」へ戻って、中学校を卒業するに至った。

### 3. ぶつかっていった私

進学した高校は、「自分で考える」「自分を出す」ことが前提とさえ思わせる環境だった。クラスの1/5程度が外国籍の生徒だったことが影響されていると思う。彼らは他の人と意見が合わなくても、臆することなく発言することが多かった。私もそれに引っ張られていった感じである。他にも私のように引っ張られた生徒も多く、高校が終わる頃にはすっかり「自分を出す」ことが自分らしいことである、という意識が形成されていった。

ここで、水を得た魚のように自分を出し、ぶつかることに楽しさを覚えた私である。そこから、「ぶつかった果てに諍いが起きてもしようがない」と思うようになった。なぜかと言うと、私も相手も自分の考えでお互いのことを表に出し合ったことに意味があるとするからである。だから、その結果が必ずしも円満でないこともあるだろうと考えるのである。そしてそれは仕方のないことだと考えていた。

この点について、Sさんと以下のような話をした。

私：実は、ここは私いんじゃないか（自己表現をお互いにすれば、諍いとなっても仕方ない）って思ったりすることがあるんだよ。実はね。

でも、S言ってたもんね、表現の方法とかって。それ、大事なのかも。もしかしたら。

S：うん。それはね、よく感じる。私。生活してて。「あ、これもっとうまく言えたら角がたたなかったのにな」とかさ。

私：そうか、そうか。それはあたしになかった考えなんだよね。わたしは角がたってもいいじゃん！って。

S：うん（笑）割とそうだよな。

私：だって、悪意があって言ってるわけじゃないもん。っていうなんか開き直り？ いやー、でもすっごくお粗末だった。

S：でもさ、言うほうも聞くほうも勉強しないとなのかなあって。

あのさ、聞くほうもさ、なんかこう、ズパーって言っちゃう人もいるでしょ。でも、本心はそ

これまでそうじゃなくて、ただちょっと言い方がストレートだったのかなあって思うことも必要だし、まあ、言うほうも、もう少し角がたたないようにいえたらいいのになあって考えると円滑に行くのかもね。

私：ああ、じゃあ、個性っていうより、方法が大事ってことか。

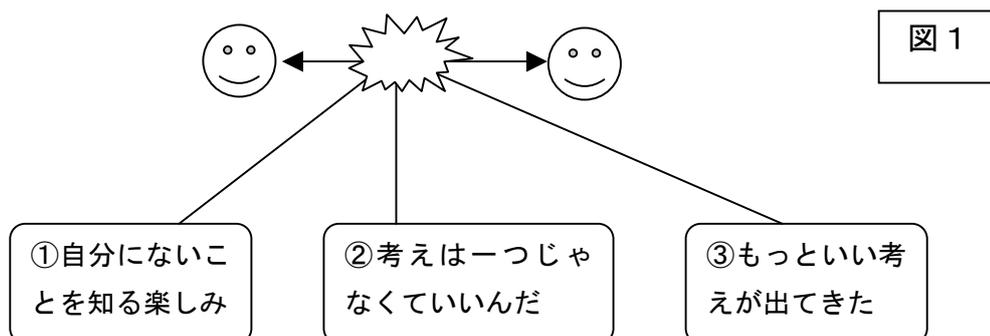
S：いや、そうなる前にももちろん個性、さっき言った考えとか心とかなないと、それ以前になっちゃわない？

Sさんとは、高校の同級生なのだが、同じ環境にいてもこう考えるようになっていたのだ。彼女との話で、自分の考えで「ぶつかる」ことは大事だが、その「ぶつかり方」に工夫が必要だということに気がついた。一段上のステップでぶつかっている彼女に感心した。

#### 4. なぜ「ぶつかる」の？

前述したように、それは「自分を出すため」であるが、それ以外にも“産物”がたくさんあるからである。

人と考えがぶつかったとき、そこから下図のように三つの産物が出てくると考える。



- ① 「知る楽しみ」とは、相手の考えを知ることによって自分の考えを振り返ったり、それが更新されたりという面が一つと、それによって、相手のことをより深く理解できること。
- ② 「考えは一つじゃなくていい」とは、受けてきた教育の影響が大きいと思う。今まではそれを否定も肯定もすることがなかった。「一つにしないとまずいよな。」という消極的な肯定に留まっていた。ぶつかることにより、様々な考え方があることがわかる。そして、本当に「考え方の多様性」を実感するのである。その結果、考え方を揃えるなんてできるはずがないと思えるのであ

る。この考えを持てるようになったことで、私は楽になった。そして、自分の意見を出すことに  
対してそれほど周りに合わせなくてすむようになった。

③ 一ぶつかった過程に、実はお互い考えていなかった新しいものが出てくることもあるのだ。それは、①をさらにパワーアップさせた感じで、お互いが更新したと実感できるものである。

私はこの産物が欲しいのである。つまり、コミュニケーションによって得たその産物は人によって  
違うかもしれないが、その先にあるものがよりよいものになるためにするのではないかと考えるよう  
になった。

その産物について、友人Sさんに尋ねた。

①については、共感するということがあった。ただ、これはある程度時間のかかるものであり、「振り  
返る」ことを日々やっていない人にとっては、なかなか意識できないものではないか、ということだ  
った。相手のことをよく理解することにしても、同じであるという考えだ。

②については、そこに至るといいけれど、現実はその思えないということだった。なぜなら、そうな  
ってしまったら仕事、社会的ルールなどの秩序が崩壊してしまうからだ。相手を理解するにはいい方  
法かもしれないが、自分がそう思って行動できるかと言われれば、特に仕事などにおいては、やはり  
相手の出方・意志を尊重する方向に行くと考えようだ。

③については、これは小さな物事を決めることから、お互いの考え方に至るまで、幅広く有効なこと  
だという共感を得た。

①・②・③に至るまでには、「賛成」「反対」「賛同」「批判」などさまざまな感情を伴う評価がある。  
そのバラエティーを出すために「ぶつかる」ことにプラスの意味があるんだということを付け加え  
たい。

## 5. my スタンド

考えを持ってコミュニケーションすると「ぶつかる」こともあり、それには産物があると前節で述  
べた。人の「考え方」とは、今までの経験や、知識、感情が基となり蓄積されるものである。決して  
思いつきとは一緒ではない。「考え」がより明確で、一過性のものではないものを私は“my スタン  
ダード”と名付けたい。

“my スタンド” つまりそれは、自分の中に「自分であることの基準」（考え方・価値観・感情など）を作ることで、常にスタンドから判断し、他者へ発信することの基となるものである。もちろん、他者から受信するときにもこのスタンドは作用する。そのスタンドにより、判断をして、共感したり反論をしたりする。

そして、そのスタンドから行われるコミュニケーションの先にあるもの、それはやがて「自己の確立」に至るのではないかと考えた。そのきっかけとなったのはSさんとの対話だった。

私：じゃあ、こういうスタンドとか、基準って、確立されてていつもみんなそれ使ってるのかなあ？

S：あたしね、A（私のこと）を見てていつも思うよ。それすごいなって思ってたかも。

私：あ、そう？ んー、やっぱ、いつも突っ込むから？ だれかれかまわず。

S：ははは。いや、自分の意見をさ、言えるじゃん。だれかれかまわずつていうか区別せずに。

私：そうだね。これでも一応は考えてるんだけどね。でも、思いのが先にドバーっと出ちゃうんだよね。ははは。よく失敗してる。

S：でもさあ、例えば、これとこれがあって、Aは絶対こっちのほうがいいと思うっていうのがあって、それをはっきり言ってくれることで、あたしは確認できる。あ、あたし本当はどっち？って。ぼやけてるなら。

で、ま、それで言うならば、確立はしてないものもあるんだろうね。

私：あ、そうだね。確立してない部分ってあるかもね。  
それを確立するためにあるのかも。

S：うん！ コミュニケーションして、通していく中で、人の意見を聞いて「あ、あたしもこっちのほうがいいかもな」とか、確立していくことはあるよね。

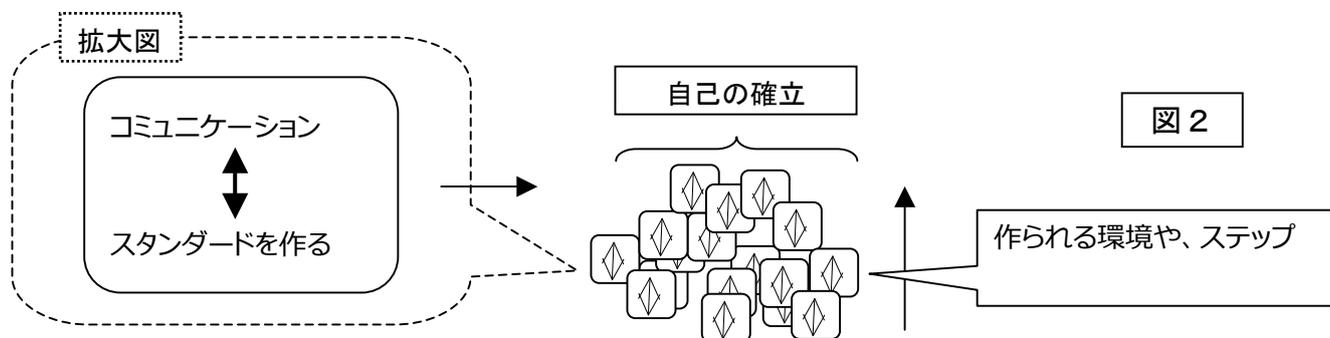
私：あ、じゃあ、そう考えると、さっき、コミュニケーションって何だろうってところに戻る

と、自分の幸せとか、利益、その先にあるものってちょっとぼんやりしていたんだけどさ、じゃあじゃあ、これを作るためなんじゃないの？回りまわって。

S: ああ。そうかもね。今まで確立していなかったものとか、確立していたと思ったことが本当は違ったとか、そういうのが確立して行くことによって一個大きくなるわけだもんね。

つまり、コミュニケーションによって、スタンダードを作り、スタンダードを持ったコミュニケーションによって、さらにまたスタンダードが作られ、自己が確立していくのである。

下図のようなイメージである。



この、自己の確立のために、私はぶつかっているのだとインタビューを通して気がついた。

## 6. 今後もぶつかります宣言

ぶつかることによって、得た産物は、私のスタンダードを作る。それによりまた私はいろんな判断をして、ぶつかっていける。それが、やがては「自己の確立」に繋がると考えている。

「自己の確立」はいつ達成されるのだろうか。その日が来るかもしれないし、来ないかもしれないが、ステップはある気がする。

それは、3. におけるSさんとの対話で気がついたことである。私は「ぶつかる」ことによって生じる様々な感情を置き去りにしていた。それはしょうがないことであると、半ば開き直っていた。しかし、「表現」を工夫することで、「ぶつかる」ことのマイナスイメージをプラスへと転換することはいくらかでも可能なのである。

Sさんの工夫は以下である。

私：ぶつかりたくないよねって人がいるでしょ。そのための手段として長いものに巻かれちゃえ的な。だから、意見っていうか考えを言わない。衝突したくないから。

**S：衝突したくないけど、言い方を変えて、発展させるようにするのがベストだよ。**

例えば、これは私がおいしくないと思っていたら、「あっちのクッキーのがおいしいよ。今度食べてみて」とか「これもおいしいんだけど、あっちのがもっとおいしいんだよ」とか。

とても単純な例かもしれないが、この工夫ができるかできないかで、コミュニケーションの得手不得手が生じるのだろうと思う。私は時に、不得手になるのは、この工夫がないためだと改めて感じた。そして、彼女のこの工夫は、彼女のスタンダード発信の「ぶつかり」を私よりも上のステップで行っているのだと感じた。

私は、今後もスタンダードを持って「ぶつかる」ことをしたいと思う。しかし、今のやり方から少し変える努力をしようと思う。「スタンダード＝個性」とした開き直りに似た武器を持って「ぶつかる」のではなく、「表現する」工夫を持って、人とこれからもぶつかっていきたいと思う。

## 7. 結論

「ぶつかること」により、得られるものは「自己の確立」のための材料である。それは、私の場合 **図1** で示した図のように、三つある「産物」としたが、それはもっと多いものかもしれない。

大切なのは、自分を作るスタンダードがコミュニケーションによって作られることである。また、そのコミュニケーションも、自分を作っているスタンダードから判断されたものでなければならないという点である。( **図2** 参照)

私の興味・関心である「人とぶつかるコミュニケーション」について、私とそれを結びつけるものは、「そうした方が自分が楽だから」「その環境は私にとって心地の良いものだから」というところで留まっていた。しかし、その環境がなぜ、心地の良いものかと考えていった先に「自己の確立」があると知った。つまり、私は自己の確立のために、人とぶつかるコミュニケーションをしているのだろう。それにより、私は今後も自分を振り返り、考えることができるし、新しい世界も広がることわかっていく。

「人とぶつかる」コミュニケーション。それ自体が自分のため、と思っていたが、実は「自己の確立」のためだったと気がついた。これを本レポートの結論とする。

## 8. あとがき

### 8-1. 私にとってのレポート活動の意味

私にとってこのレポート活動はどんな意味があったのだろうか？

まず感想としては、「驚いた」の一言である。興味・関心のあるテーマについては、当然自分の確固たる理由が、いつでもきちんと見える形で存在するはずだと信じて疑わなかった。でも、自分のことなのに、なんだかうまく説明ができない。それを改めて「なぜ？」「なぜ？」と考えることは想像以上に大変だった。しかし、その理由を深く掘り下げることによって、知らなかった根元を覗くことができた。

この感覚は初めてである。自分のことを人から指摘されたりして、初めて「え、私ってそうなんだ」と驚くこともあるが、それとはまた違う感覚である。それは外から指摘されるものだが、今回は内からの指摘である。自分で自分を内側から、指摘する。しかも、それを他者を通してしているのである。ややこしいが、つまり、他者からの刺激によって、自分の内側が喚起されるという経験をした。

思わぬ結論が出た時には、なんだかゾツとした。

自分の中に知らない自分を見つけるというのは、こんな感覚なのかと、変な体験をした気分である。

では、その変な体験の手順をレポートという形で記述し、残すことの意味とは、何だろう。

それは、自分の変わったポイントを可視化しやすくするためだったのだろうと思う。さらに、思いのままに残す日記のようなものと違い、他人にわかってもらうため、一度自分で咀嚼したことを「表現」する方法も可能にしている。

授業内のグループで話をしていた時、『自分の中にあるものは揺るがないんだから、テーマはいくつあっても結局同じところに行き着くのではないか。』という意見が出た。まさにそれだと思う。

同じ人間でも、興味・関心は一つではない。しかし、テーマをいくつ選んだとしても、それと自分を結びつけるものは何かを考えた時、結局は同じ一つの根にたどり着くのではないかと確信している。

逆に、この根が何なのかがわかれば、これから先どんなことをテーマに選ぼうとも、あまり迷わずに進んでいける気がしている。迷ったら、根を見ればよいのだから。そして、根が見えなくなったら他者を通して探すという方法も私は知っている。これは何も「日本語」の授業だけに留まるものではない。「ことば」を通す者・事においては共通するものだということを実際に体験できたことが、非常に意味のある活動だったと振り返る。

8-2. ことばの市民になるとは？

レポート活動の意味から「ことばの市民になる」とはどういうことを考えた。「市民」とは、ある枠の中を構成する一分子のような存在だが、それが無いことには、その枠は構成されないものだ。その枠とは、今回は「ことば」なのである。では、その「ことば」を構成する一分子にはどうしたらなれるのだろうか。

それは、まさにこの活動を指すのではないだろうか。グループ活動（他者）を通して、自分の根を探る。その根の部分を見つけ、それを自分のことばで表現した時、「ことばの市民」となるのではないだろうか。「ことば」という枠は、その根を曲げたり伸ばしたりも出来る。だから自分の根を見ておかないと、知らず知らずの内に自分の根が「ことば」によって違うものになってしまうこともあるのではないだろうか。そうならないためにも、「ことば」の枠の中で自分の根を持つ市民となる必要があるのだと思う。

私たちは日々、自分でことばを選び使っているつもりでも、実は使わされているだけなのかもしれない。私は日本語で教育を受け、日本語の本を読み、日本語のテレビを見て、いつの間にかたくさんの日本語を習得している。しかし、この活動を行い、自分でも気がつかなかった根底にある自分を、どんなことばで表現したらよいか、非常に悩んだ。どう表現すれば、自分の根を他者に見せることができるのだろう。「自分のことばで表現する」その作業こそが、本当の意味で、ことばを自由に使えることを意味し、ひいては市民となるのだと考える。

以上